

邦訳書への序言

加藤 正

一、ここにその邦訳をわが国の読者に送る『自然弁証法』はマルクス主義の建設において、その哲学的方法論的基礎を定式化した功績を担っているエンゲルスの、哲学のおよび自然科学的研究の成果をなす諸手稿を集めたものである。これは同じ著者の名著『反デューリング論』および『フォイエルバッハ論』と内容上密接な関係を持っている。この三者は相補うてマルクス主義の哲学の宝库をなしている。而して本書に収められた諸手稿が取扱っている主要課題は、自然科学の諸成果を綜合し、自然科学の理論的諸問題に解答を与え、一方にはまたそれによつてマルクス主義の理論的方法たる唯物論的弁証法を基礎づけるとともに、経験論や先験論等の諸他の方法の一面性と中途半端性に対して批判を加えることにあつた。読者は前記二著において与えられているこの方面の簡潔な光彩ある叙述の基礎をなす諸資料を本書において発見することができる。

一、マルクス主義の理論的（哲學的方法論的）基礎づけということに関しては、吾々の間には甚だしい誤解が一般にゆき亘つている。これは、とりも直さず前記の中途半端な諸方法の執拗な影響を物語るものであるが、一例を挙げるなら唯物論的弁証法は何等かの主観——例えば階級のそれ——の本質からして必然的に導出できるものとして規定せられたりしている。評判の或る著述家は、自然弁証法を除いても弁証法的なる史的唯物論は独立に成立しないか否か、弁証法は自然を固有なる成立の地盤としているか否か等、一般的誤解を典型化した興味ある疑問を提出している。ところで事実をいえば、弁証法のみならず凡理論的方法の名に価するものはすべて自然に対する

洞見を根拠として成立したのである。そしてこんなことを忘れてしまうのは自ら研究することを知らない亜流に限るのである。

世界を必然的な連関において把握するところの理論的な意識は人間に最初から具そなわっているものではない。意識が世界を直観や表象の形で芸術や宗教の中に求めているとき、この意識を駆かつてその理論的な把握に到らしめたものは実に自然に対する観察であつた。蓋けだし、自然においては事物間の相互諸関係が最も簡単な形で比較的持続的に現われているということが、大きな幸をなしたのである。一旦自然の理論的な取扱い方が定式化せられると、それと同じ方法で他の諸領域が処理せられてゆくのは当然且かつつ正当である。何故なら、第一に意識はそれ以外に世界の理論的取扱いの別な方法を知らないわけだし、第二に世界の一切の諸事象は自然の諸条件の中から発展し来り、自然の必然的な諸関係の中においてのみ、即ち自然的必然の一要素としてのみ、成立しているという理由から、世界を自然的原因によつて説明し、自然について発見せられた理論的方法を意識的に応用することが夫々それぞれの領域の理論的な把握に対して実際の成功をもたらしたのだから。いうまでもなくこのやり方にも、はじめの間は、具体的な諸事象を既習の一般的な自然的必然の中におしこめてしまうことによつて、必然関係の夫々それぞれの領域における具体的発現の把握を、即ちあるがままなる具体的形象における把握を、不可能ならしめるという欠点があつた。そしてそういう把握が問題となる限り、理論は沈黙するより外なかつた——それは事実や實際の問題で、理論の問題ではない、と。経験論は専まらこつた個々の事実に関して何らかの概念を得ようとする方法なのである。だからその到達点といえは当然周知の如く必然性の抹殺、そして理論の抹殺である。この経験論にしろやはり自然の実証的な研究の必要から繁栄に持ち来されたのであつて、それが哲学として定立されるに到つて探究のあらゆる方面へ移入せられた。吾国の新進思想家は概ねこの立場から脱却していないのだが、それというのも彼等が必然性と理論との根拠たる自然そのものを忘れているからである。経験論が自然研究の領域から哲学に移され、其処そこで自己の宿命を必然性の抹

殺にまで辿たどったとき、これに対抗する最も有力な論拠は、自然の認識において自然科学の先頭は既に経験的方法を乗り越えて前進しているという事実であつた。先験論はニュートン力学において躍進を見た数学的物理学によつて経験論を克服した。だがそれはこの力学を基礎としたという正にその理由によつて理論の前述の欠点を除去することはできなかつたのである。何故なら、力学的は通常の言葉で機械論的と呼ばれている通り、先験論が恢復かいふくした必然性は依然抽象的形式的のものだつたのだから。はじめて具体物を具体性において理論的に把握とらえる道を拓ひらいたのはシェリングであつたが、これを可能ならしめたのはこれまた自然科学の成果である。即ちこのとき自然科学は自然の諸々の領域の中に種々な程度において何等かの法則性の存在を証明し、また諸領域相互の密接な連関を暗示する幾多の事実を摘出することに成功していた。そしてこれらの諸成果から彼は世界の連関について次の如く結論することができたが、それは今日まで何等の反証によつても、覆えられていないのである。即ち自然の連鎖は、最も根本的な力学的過程からはじめて物理学的、化学的、生物学的過程へと、そして最後に精神的過程へと、一つの過程内の必然性は次の過程への発展の諸條件を準備し、従つて一つの過程は次の過程を根源的に規定しつつ、かくて絶えず発展してゆく。意識はこの過程の中に発展したという限りにおいて、当然自然的諸過程に規定されざるを得ぬ。そしてこの規定によつて理論的意識が生ずる。——過程に関するこういう見解を人間の歴史的活動の領域にまで推し及ぼし、世界総体の統一的な理論的把握を完成したのはヘーゲルである。そしてその結論は依然こうである——

理論は現実的に活動の舞台に立ち現われるためにはまず最初に自然において自らを規定しなければならぬ。そしていまや自然科学が自然の諸領域相互の現実的な転化を次々に証明していったとき、右の二人において諸過程について予想し得る論理的必然の連関を辿たどつて自己を規定することに止まるより外なかつた理論的意識は、今度は諸過程について明かにせられた因果的必然の連関を辿たどることによつて、全く新たな規定を獲得すべき事情に当面したのである。過程は論理的思惟がこれを連結する以前にそれ自身において連結せられているのである。エンゲルスはこの

事情を現実化した唯一の哲学者である。そして、マルクス主義のあれこれの提説を出来上ったものとして任意に取出だし、それらに自己流の解釈を与え、自己独特の立場から基礎づけるといふ風な小細工をもてあそぶのでなくて、それらの諸提説を現実世界の真の連関に即して把え且つそれに即して発展せしめることが要求せられる限り、吾々は理論そのものの約束を守らねばならぬ。即ち先ず吾々のだらしなない頭脳の運動を自然そのものにおいて根源的に鑄直してかからなければならぬ。即ち吾々の思惟規定は、あれやこれやの部分的現象によつて支持されていることに満足することなく、自然の中からその規定を展開することによつて基礎づけられていなければならぬ。自然は弁証法の検証である。検証されることを欲しない独断的思惟のみが自然を嫌うのである。マルクスとの協同においてマルクス主義の理論的基礎づけに従事したエンゲルスは、その場その場の『具体性』に対して無原則的な反撥を続けるアメーバどもとは異つて、その具体性を因果的必然の中に把えることを知っていた非凡な思想家であった。こんなザツとした指摘にとどめて、いまは詳細な論究を別の機会に譲らなければならない。

一、邦訳はロシア版のマルクス・エンゲルス・アルヒーフ第二卷（一九二五）の内容をなす『自然弁証法』による。そして本文校訂に関してドイツ版のアルヒーフ第二卷（一九二七）の主要内容をなす『弁証法と自然』が利用せられた。後者は前者における誤謬が原の手稿について詳細に訂正され、且つその手稿における抹殺部分が起こされている。これらのうち既にロシア版の本文において恢復せられてあるものを除けば、その他の部分は大きく重要でもないで、この邦訳においては大抵省かれている。抹殺部分は「……」の印で括つて區別してある。なお最近ロシア版の第二版がたようであるが、訳者は未だ見るを得ない。

本書邦訳の途中において私は畏友加古氏の助力をお願いした。訳者の分担についていえば、解題、第一章および第三章が私の、第二章および第四章第五章が加古氏の手になる。訳稿は、両人の相互検討によつて纏めあげるといふ最初の予定が加古氏の不慮の不幸のために妨げられた後、私一人が処理することとなった。但第一章を除いて私

の訳稿は加古氏の指示によつて修辞上の改良が加えられている。加古氏の訳稿を私が纏め上げたということが、もしそれによつて彼の訳筆を損うような結果になつたとすれば、彼ならびに読者に対して深く謝る外はない。本書におけるすべての誤謬や誤解については私がその責任者である。なお第一章の解釈についてはロシア版におけるロシヤ語の対訳が非常に参考になつた。この機会に浅学な私のために教示を惜まなかつた諸先輩、および参考資料の渉猟によつて不自由な立場にあつた私に大きな援助を与えてくれた親切な友人島之夫兄に感謝を表明したい。蓋し私の功績は——もしありとすれば——すべてこれらの人々の中に没してしまふのである。

一、凡本書の如き深遠な思想を盛つた内容を、しかも遺稿ということによつて必然的に技術的困難を予想せしめる内容を、訳者等の微力をもつてよくこの国の言葉に移し得ると考えることは甚だ奇怪である。確信あるそれぞれの専門科学者からも明解を得られずして、そのままに訳出せられた個所も二三ある。もしそれ、訳者の未熟からする無意識の裏の誤解等に至つては無数であろう。訳者は読者諸兄が、本書の重要さを認識せられる限り、辛辣な批評と好意ある助言とを以て本書邦訳の完成に協力下さることをお願いする。この巻における欠点はすべて次の巻において指摘訂正の機会を持つ筈である。なお次の下巻において術語および事項についての簡単な訳注を附録する予定である。本文にも理解の便のために適宜訳注を挿入した。小活字を用い「」で括つた部分がそれである。且つまた殊に第一章の諸断片にあつては、翻訳は外国語をもつてするパラフレーズであるという見解が踏襲せられている。

一、最後に、かかる未熟な訳書が生れ出るについては河上肇、三木清両先生ならびに岩波茂雄氏の破格の御好意によるものです。

一九二九年三月

加藤 正

追記

昨年二月稿を起こしてより既に一年有半を越えている。その間この訳稿は版行を遅延せしめる種々な支障に遭遇しなければならなかった。そして今春既訳の分の第五章までを上巻としてとり纏め、序文を書いたあとで、私は再びこれを版に附し得ない事情に出会った。しかしながら、一方では無気力な解説書や通俗宣伝物が浅く広く流行し、自立的な開拓者としての仕事は専ら素姓不明な亜流哲学に委ねられ、他方ではかかる一切の情勢に対する本能的な不安が、また一步たち入って唯物論の眞の理論を内容的に握みとろうとする焦慮が、自ら何かを為さんとする真摯な学徒の間に感知されるとき、唯物論的弁証法的思惟の最も基本的な諸規定を検討し、この思惟の運用を最も純粋な形態で与えている、本書の如き創始者の基礎的な著作を、もはやこれ以上私事をもって抑制することは我慢ができなくなったのである。そこで私は一切の責任を喜んで負い、ここにその上巻を刊行する。

自然弁証法の問題は、これまでも時々論ぜられた。しかし全く無連絡に、また極めて不用意に、そして多少とも好家的に取扱われたに過ぎない。そして自然弁証法そのものの意味内容を真面目に理解しようなどと考へたものは一人だつてなかった。一言にして蔽えば自然弁証法は名前のみ有名である。そして弁証法的唯物論の研究者にとってそれを如何に取扱うかが特に興味を中心となりながら、弁証法理解のあらゆる流派がそこにおいて革命的脂粉を洗いとられ、正気の姿において吟味せられるという正にその理由をもつてこの問題は吾々の空威張りの未熟な不正確な意識の手に負える代物ではなかったのである。

私は前述の序文において、吾々が貧弱な体験と由緒の知れない教養とからでつち上げている諸方法を先ず自然において従つて自然的原因から展開せられ来た理論哲学の本流において、再規定することから弁証法的唯物論の建設展開に到るべき道の必然を指摘しておいた。私はこれをもってエンゲルスの見解を正当に祖述し得たものと確信

している。そしてこの見解の下に私は、当時の科学の成果に基いて自然の諸連関を明かにし、またそれによつて吾人の理論的思惟を規定し再規定することを主題としたところのこの『自然弁証法』の意義、特にわが国現在の諸理論意識に対するその意義をほのめかしておいた。つまり自然弁証法が唯物論の全体系に対して有する地位を私は――表式としてではなく――固有の機能において暗示しておいたのである。しかしその後他の諸討論家との交渉から、私は更に一つの註言を附記することを必要と考えるに至つた。それは極めて平凡なる命題、即ち思惟と自然とは交互關係に立っているということ、^{しか}而も有名な『交互關係における決定要因』は自然であるという命題に關係している。従来自然弁証法に関しては、それが唯物論的弁証法の自然認識への具体的適用であるという点のみが専ら^{もっぱ}注意せられたにすぎない。そしてこの唯物論的弁証法自体がいかなる哲学史的、実在的前提をもっているかに関しては何ら真面目な研究が發展しなかつた。それで外面的な随件關係をそのまま原則化してしまふ經驗主義者がこの弁証法を自己の狭い視野に入つて来る勝手なものと結びつけて、それを『基礎づけ』ても、大した抗議に出会わずにすんだのである。だが思惟が自然を自己の立場から定式すると同様に、自然はまた自然の方から思惟を規定する。しかも、この交互關係において真の自然認識は結局後者の關係においてのみ達せられるのである。自然弁証法はかかる特質をもつた交互關係の中で思惟が自然に与えた一の定式である。この認識過程において思惟と自然とを媒介するものは人間の実践である。自然を变化するこの実践から社會關係が發展する。実践は自然を变化せしめるが、それは自然の客觀的連関に従うことによつてのみ变化せしめ得るのである。自然物は社會的關係の中で新しい規定を獲得するが、自然物の自然物としての性質は何ら失われることなくその独立性を保っている。従つてこれを思惟の側からいえば、思惟は自然について得られた何らかの觀念をもつて、実践的に自然を規定するとき、この実践を通じて逆に自然に規定せられる。そしてこの実践において、自然による被規定性を通じて、思惟と自然とはますます密接な相互合致にもたらされる――即ちますます深まりゆく自然の認識がもたらされる。実践がこの両者の媒介を

なすということをして誤解して、実践即ち社会関係によつて規定せられた思惟を自然に適用エントゲーゲン・プリンゲンすることにおいて自然認識が成立するという風には、き違えてゐる人々が自ら唯物論者と名乗つてゐる一般的潮流に鑑かんみて、私は、自然に合致せしめ得る思惟規定即ち自然認識の方法は自然の抽象であり反映であらねばならないこと、そして思惟は実践によつて規定されるのではなく、実践を通じて自然によつて規定される場合にのみ自然の反映となる、という点をかく特記しておきたいのである。実践的關係や規定こそ逆にこの自然的關係や規定の上に基礎づけられるべきであり、これによつてのみはじめて合理的に、即ち眞の規定性において、把握され得るということは思惟の歴史もまたこれを証明している。世界説明の方法から神話における如き一切の人事的规定がとり除かれ、世界をそれ自身の因果的連関において、即ち自然的原因（原質）からの展開として把握する方法が確立せられたとき、始めて理論的思惟の發展に対する前提が置かれたのである。それ以来自然との交渉からもたらされる自然的原因に対するますます深まりゆく認識の上に、この原因からの展開の過程をますます先へと辿たどることによつてこの世界説明は漸次その正当性を確立していった。この方向に対して人間実践の種々雑多な關係のあれやこれやを基礎としてその上に全世界の連関を振おじ曲げようとするあらゆる試みが空しい反抗を続けている。これらの諸流派は、それぞれの基礎となつてゐる実践即ち生活關係が、ある條件性のもとで、活氣を呈した限りでのみ何らかの意義を持ち得たにすぎない。さきの方向は正まにこの実践關係をこの條件性の上に認識するものであった——即ち、この諸流派が各自の關係を至上化する間に、それを自然的原因による事物の合理的連関の中において規定し、それに一定の限界性を指定し、最後にこの合理的連関の一契機として包括することによつて、自然過程から始めて人間的諸過程へと、不斷に發展していった。唯物論とは、右の諸流派が觀念論の一陣營を形成するのに対し、この方向における世界把握に与えた名稱に外ならぬ。そして弁証法的唯物論はこの發展が現に到達し得た最高水準を表明するものである。

唯物論的方向の正しさは人間の何らかの生活態度によつて合理化されるのではなく、事物の客觀的連関によつて

支持せられているのである。

この『自然弁証法』がわが国における現下の理論的意識に一の新なる方向と力強き躍進を与えるであろうとの大いなる期待をもって。

昭和四年九月六日 加藤 正 追記

附記

校正中に共訳者加古氏は再び事情を恢復かいふくされ、全部を点検するの労をとられた。疑いもなく、この訳稿はそれによつて一層の改良を見た。

一九二九年十月

- 『加藤正著作集』第一巻（「加藤正著作集」刊行委員会、一九八九年一二月）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{d}v\text{i}p\text{d}f\text{m}x$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。